

大國主命
前編

島田
建路

青山ライフ出版

神話からの連想

皆様、日本国誕生の歴史に御招待いたします。

大國主命

〔少名彦の死と三輪の大物主王〕より

三輪の大國主命による民族の大移動で朝鮮から女達もやって来た。

日本の原住民の女はむしろサルに似ていた。猫背で毛深い。しかし、やって来た女達の綺麗な事綺麗な事。北方系の透き通るような白い美しい肌をしていた。朝鮮から来た綺麗な女性のスーとした背に腰を振るさまに男達は、ため息を持って迎えた。

その中でも三輪の大國主の妃の勢夜陀多良姫は特別に綺麗で、大國主命の王子・事代主命の目にとまった。その昔はトイレは川の中に木を渡してあるだけであった。

神話には……勢夜陀多良姫が用を足しているとき、王子・事代主命はたまらなくなって泳いで行き、丹塗りの矢の如くなつて美女の陰部をつついた。勢夜陀多良姫が驚いて逃げ帰り家に帰ると雄々しき男の事代主命が持ち構えて来た。そして二人は交合した。この時に出来た娘が後に神武天皇の妃となる伊須余理姫であった。恋は神代の昔からあった。

大國主命 前編◆◆目次

序章	6
出生	7
因幡の白兔	9
須勢理姫	19
少名彦	28
吉備国よりの連想	31
少名彦の死と三輪の大物主王	37
徳山堂の本	47

大國主命

前篇

小さな出雲の島が、小さな根の国が、如何に西日本に広がる大國になったのか。日本國を創つた「大國主命」が、大國、を誕生させる物語。歴史書に無い、日本國誕生の、悠久の歴史を述べていく。

序章

黄金色の太陽が登って行く。この黄金の光輝く太陽の出づる東の地に、日本の国があると、その昔より信じられていた。

先進民族であった中国の海洋民族が、日本の国を求めて東へと流れて来て、出雲に流れついた。この海洋民族は、天照大神により海へと発展していき、又、スサノオの命によって作られた根の国によって、陸地へも発展していった。

日は登り、又沈み、木々に吹きつける風の如くに時は過ぎてゆき、出雲の国は天照大神より四世の代・刺国大神の世となり、同じく根の国はスサノオの命より四世の代となっていた。

大国主命誕生前に、この世の終わりを思わせる恐怖が出雲の人々を襲った。グラグラと大地はゆれた。そのうち幾分ゆるやかになったと思つた直後、戦りつすべき事態はその後起こつた。大地は激しく波打ち、果てしなく盛り上がり、木々は激しく泣けさけんで、なぎ倒され、山はもたえ苦しみ嘔吐することが如くウオーという音とともに土砂をはき出した。大地は裂け、多くの人を飲み込んだ。

人々はこの世の終わりを思つた。

だが、自然はもつと無情であった。この後に、よりすさまじい恐怖が人々を襲つた。しばらく

すると地をゆるがす様なゴーという音とともに巨大な海の壁が人々を襲い、一瞬にして津波は人々を飲み込んで地獄の果てへと連れて行つた。そして天の岩戸を始め、全ての家々と自然を破壊し尽くした。

想像を絶する破壊の恐怖の後に、大地に大いなる異変が起こつた。この世の終わりを思う棲ざまじい音とともに海は真二つに割れて、エメラルドの様な青い海の中より、青白い処女の様な大地が力強い息吹を上げて生まれ出た。

出雲の島が彼方の『根の国』本州へとつながって行つた。即ち神話の『根の国』は出雲の島へと陸続きとなり『島根の国』となつた。

この大地の大異変は新時代の始まりであり、偉大な巨人・大国主命が現れんとしていた。

出生

天照大神以降、出雲の国は海岸へと発展した。天照大神の夫・スサノオの命は天照大神と別れて根の国と新羅を興した。根の国は新羅と共に鉄器による雄々たる新しい文明で陸へと広がっていた。根の国の成り立ちも鉄であった。良質な鉄は新羅にあった。

その新羅と根の国の交通は、出雲の舟であつた。

だから根の国は出雲の国を宗主国として奉つていた。

だが出雲国は、島々を渡り歩く海洋人にすぎなかつた。新しい鉄器文明を使つて開拓していく根の国の隆盛に対し、出雲の衰退は目を覆うものがあつた。それ故なおの事、出雲の少年少女達はスサノオの命の冒険物語に夢をはせた。

そしてこの頃、あの大地震が起つたのであつた。

壊滅状態にあつた出雲の国に、根の国より、りりしい怪力の王子・冬衣の命を部隊長とする救援部隊が送られた。王子・冬衣の命部隊長の活躍はめざましいものがあつた。あの天の岩戸のガレキを整理していると、女性のウメキ声が聞こえてきた。冬衣の命部隊長は怪力で、この岩を次々と取り除いていくと、岩の間にキズ一つなく、美しい娘が横たわつていた。その娘こそ出雲国王・刺国大神の娘、刺国若姫であつた。死んだはずの娘が生きていたのだから、出雲の王・刺国大神の喜びは言うまでもなかつた。

王はこの部隊長を呼ぶと、部隊長・冬衣の命はスサノオの命が大蛇退治をして助けた櫛名田姫の五世の子孫であつた。刺国若姫も物語の主人公、櫛名田姫になつた様に夢でも見ている様にこの若者を恋した。そして王は、この若者を娘のムコに迎え入れた。出雲の庶民はスサノオの命が生まれ変わり出雲に帰つて来てくれた。刺国若姫が天の岩戸でスサノオの命の子孫である部隊長・

冬衣の命に助けられて結婚するのは、天照大神とスサノオの命の時代を超えた再婚だと喜びわき立った。しかし庶民と王宮の人とは見解が違っていた。

第一に、根の国より出雲の王宮にムコを迎えるのは、慣例を破った異例の事である。出雲の王宮にとつてはスサノオの命は、蛮人に魂を売った裏切り者であった。又、日々隆盛して行く根の国に対するネタミもあつた。慣例を破る事は新しい時代の始まりであると同時に、苦しみに耐える悲劇の始まりでもあつた。結婚した刺国若姫の夢と現実は大きく違っていた。おちぶれていく出雲の王宮は蛮人と結婚した王女に陰しつな差別が始まつた。新しい時代の二人に理解を示した刺国若姫の父であり王であつた刺国大神が死んでからは、陰しつないじめは、手をふるい出した。この二人の間に生まれた子供こそ、この世を創りし偉大なる巨人・大国主命であつた。大国主の悲劇もこの様な背景から始まつた。なぜなら子供は大人の百倍も敏感である。大国主は子供の頃から「蛮人の子」といじめられて、王族の間では彼は奴隸の様にあつかわれた。

何も分からない幼い大国主命はヨチヨチと歩きながら「蛮人、蛮人」と自分の事を言つて笑つた。

因幡の白兔

子供は可愛いと言うが、子供ほど人間の残酷な本性を如実に現す物はない。例えば、蛮人が赤の他人であれば猿や犬のように可愛がるが、その猿や犬が自分と同じ王族であるならば、その嫌悪感は異常なまでに高ぶるものである。

大国主は物心着いた時から、蛮人として王族から差別されていた。しかし、どの子供もそうする様に、物心がつくと王族の子供達の中に入って行った。すると子供達の中の一番年長者が「この山に登れ」といきなり言った。大国主は命令されるままに小高い山にヨチヨチと登って行った。山に登れば仲間に入れてもらえると思い、仲間に入りたいたい一心で下を見ずに恐ろしいものを我慢して、一生懸命に登った。上に登って見ると広い海の見える素晴らしい景色が見えて来て、大国主は得意になって「オーイ、オーイ」と下にいる子供に向かって声を張り上げてみせた。すると下の子供達はヒソヒソと意地悪そうな笑いを浮かべて「ワー」と声を上げて一斉に逃げ出して行った。大国主は急激に、この世の中になつた一人残された不気味さと恐ろしさに山を降り始めた。山は登る事より降りる事の方が何倍も難しい。ましてや大国主は歩き始めたばかりの幼児である。滑り落ちたらそのまま死んでしまう。

その恐怖を抑えて、足をズルズルと滑らしながら泣きながら幼い大国主は降りて来たのだった。こうして大国主へのいじめは始まり、エスカレートしていった。

しかし大国主は幼かった。「磨呂も仲間に入れて」と入って行くと、中の一人が大国主の襟首を掴んでめつた打ちにして「蛮人は磨呂などと言う王族の言葉を使うな」と捨てゼリフを言つて